

銭形平次捕物控

懐ろ鏡

野村胡堂

青空文庫

「親分、面白い話があるんだが——」

八五郎のガラツ八が、長い顎を撫でながら入つて来たのは、正月の十二日。屠蘇機嫌から醒めて、商人も御用聞も、仕事に対する熱心を取り戻した頃でした。

「しばらく顔を見せなかつたじゃないか。どこを漁つて歩いてたんだ」

銭形の平次は縁側から応えました。湯のような南陽にひたりながら、どこかの飼い鶯らしい囀りを聴いていたのです。

凝としていると、梅の香が流れて、遠くの方から、時々ポン、ポンと忘れたような鼓の音が聴えて来るといった昼下がりの風情は、平次の神経をすっかり和めていたのでしよう。「親分、憚りながら、今日は申し分のない御用始めだ。野良犬が掃き溜めを漁るように言つて貰いたくねえ」

「大層なことを言うぜ。どこでお屠蘇の残りにありついたらんだ」

平次はまだ茶かし加減でした。こう紫に柵引く煙草の烟を眺めて、考えごとをするでも

なく、春の光にひたりきつてゐる姿は、江戸開府以来の捕物の名人というよりは、暮しの苦勞も知らずに、雑俳ざつばいの一つも捻ひねつてゐる、若隠居という穏やかな姿でした。

「親分、神楽坂かぐらざかの浪人者殺し、あの話をまだ聴かずにゐるんですか」

「聴いたよ、——が、二本差りやんこと鉄砲汁は親の遺言で用いないことにしてある」

「ヘッ、こいつはたまらねえ御用始めですぜ。親の遺言はしばらく鉄砲汁の方だけにしちやどうぞです」

ガラツ八はいつの間やら、日向ひなた一パイに塞ふさがつて、お先煙草を立てつづけに燻くゆらしてゐるのでした。

「ことと次第じゃね、——話してみな、どんな筋なんだ」

暮からあぶれてゐる平次は、まんざらでもない様子です。全く松の内から江戸中を駆けずり廻つて、親分のために素晴らしい御用を嗅かぎ出そうとしていた、ガラツ八の心意気を知らないわけではなかつたのでした。

「ね、親分。幽霊が人を殺すでしょうか」

「何を下らねえ」

「生霊、死霊てえ話は聴いたが、足のねえ幽的が、後ろから脇差で人を殺すなんてことが

あるでしようか」

「馬鹿も休み休み言うがいい。そんな物騒なエテ物が、箱根のこつちにいてたまるものか」
平次は頭からけなしつけますが、その癖ガラツ八の話に、充分すぎるほどの興味を動かした様子でした。

「本当ですよ親分。川波勝弥かわなみかつやって年は若いのが、恐ろしくヤツトウのうまいのが、神楽坂で芋いものように刺されているんですぜ。側には川波勝弥を怨うらんで死んだ娘の、懐ふところ鏡かがみが落ちて割れているなんざ、そっくり怪談ものじゃありませんか」

「なるほど、そいつは面白そうだ。最初から筋を通してみな」

平次はだいぶ乗気になりました。

「こうですよ、親分」

ガラツ八は吐月峰はいふきをやけに引つ叩たたくと、煙管きせるを引いて物語らんの構えになります。

二

牛込うしごめ肴めさ町なまちに町道場を開いている、中条流の使い手柴田しばた弾右衛門、一年前から軽い中

風に罹^{かか}つて、起居も不自由ですが、門弟たちが感心に離散しなかつたので、この正月も、恒例の十一日に稽古始めを行い、鏡餅を開いて深夜まで吞みました。

門弟といつても、筋の良いのは一人もありません。柴田弾右衛門は恐ろしく気楽な男で、門弟の身分などに選り好みを言わなかつたのと、百姓町人といえども、身のたしなみに一応の武技は心得ておくべきであるという建前で、門人の半分以上は町の若い者たちに、無禄の浪人ども、それにほんの少数の裕福でない御家人^{ごけにん}の子弟が交っているという程度のものでした。

門弟の中で、川波勝弥と林彦三郎は抜群の使い手で、この二人が柴田弾右衛門に代つて稽古をつけてやっております。勝弥は二十八、彦三郎は二十六、どちらも浪人で、どちらも元氣者で、その外には、町人側に大工の杵次^{まさじ}、植木屋の五助、御家人の子の岸松太郎、大原幸内などは、いずれも若くて腕っ節の良いところでした。

柴田弾右衛門には娘が二人、姉をお類といつて二十三、妹をお半といつて二十歳。どちらも美しく生い立って、門弟たちの魅力になつていましたが、姉のお類は去年の秋、仔細^{しさい}は解らず、武家の娘らしく懐剣で自害して相果てました。高弟の川波勝弥と娶^{めあ}合せてこの道場を継がせるつもりだったのが、柴田弾右衛門が癡人同様になつて、道場の前途がはな

はだ心細くなつた上、川波勝弥が近頃望まれて、さる大身の養子になることになつたので、お類との約束を反古にし、お類はそれを悲しんで自害したのだという噂も伝わりました。

それはともかく、川波勝弥はそんなことは知らぬ顔に、毎日道場にやつて来て、少し人の好い林彦三郎とともに、門弟たちの相手をしておりました。正月十一日の稽古始めにも、吉例の勝抜き一本勝負をやり、見事大原幸内、岸松太郎、林彦三郎の三人を叩き伏せて、優勝をかちえ、心ある者から代稽古ともあるものが、大人気ない——と思われたりしていたのです。

「その晩鰻腹呑んで、亥刻半（十一時）頃飯田町の家へ帰るところを、神楽坂の路地の中でやられたんで。こいつは因縁事じゃありませんか。ね、親分」

ガラツ八の八五郎は説きおわつてこう注を入れました。

「因縁事じゃそれほどの腕利きを一人殺せないよ。いくら酔っていたにしても、脇差で背中からえぐられるまで知らずにいるはずはない」

平次はもう事件の中へ頭を突つ込んで行きます。

「だから、林彦三郎が一番臭いということになるでしょう。川波勝弥を芋のように刺せるのは、林彦三郎の外にはない。おまけに、その日一本勝負でひどい負けようをしている」

「それっきりの話なら、わけはないじゃないか。強いと言ったところで、浪人者の一人や二人、縛って縛られないことはあるまい」

「その通りで、手に余るから親分の力を貸して下さいってわけじゃありません。借りたいのは親分の智恵の方で」

「お安い御用みただが、小出しの智恵は出払ってるよ」

「ね、親分。その林彦三郎は、川波勝弥よりも呑んで、ベロンベロンに酔払って、下男部屋へ転げ込んで、泊ってしまったとしたらどんなもので」

「フーム」

「下男の熊吉、——こいつは五十そこそこだが、生れたままの独り者で、もつとも松まつかわ皮かわ疱瘡ぼうそうで二た目とは見られない顔だが、道場のだれかれに聴いてみると、正直者で通つてゐるということです。この熊吉が宵から林彦三郎の介抱をして、小用場へまで一緒に行つてやったというんだから、こいつは嘘じゃないでしょう」

「外には？」

「岸松太郎と大原幸内は宵のうちに帰って、家から一と足も出ません。五助や柁次は飲み足りなくて神楽坂で一杯やっていたそうだし、困ったことに、川波勝弥を殺しそうなのは

「一人もありませんよ」

「死骸の側に懐ろ鏡があつたというじゃないか」

「ギヤマンの懐ろ鏡で、こいつは二朱や一分で買える代物しろものじゃありません。赤い羅紗ラシヤの鏡入に挟んだまま、死骸の側に落ちて割れていたんですぞ、親分」

「変な声を出すなよ、虫が起るじゃないか」

「捨てられて死んだ師匠の娘、お類の業わざとでも思わなきやこいつは見当もつきませんよ」

「幽霊が脇差を持って歩いて、人間を芋刺しにするのかい」

「悪い流行物はやりものだ。行つてみて下さいよ、親分」

「師匠の柴田弾右衛門という人は？」

「気の毒なことに、昨日まで床の上に起上がっていたが、今朝の騒ぎでとりのぼせたものか、まるつきり正体ありません。大おお 軒いびきをかいて寝ている側で二番目娘のお半さんが

介抱だ」

「大軒？ そいつはいけない。気の毒だが当り返したんだ」

「可哀想なのはお半さんだ。良い娘ですよ、親分」

「そんなものがあるから、八五郎がいきり立っただらう」

平次はニヤニヤ笑いながら、それでも外出の仕度に取りかかりました。

三

飯田町の川波勝弥の浪宅へ行つてみると、神楽坂から死骸を持込んだばかりのところ、町内五人組の老人たちと、勝弥の友達らしいのが二三人、何かと世話を焼いております。

家の中の調度も一と通り、裕福らしくはありませんが、そんなに困っている様子もなく、雇^{やとしいにん}人は下男一人、婆やが一人。いずれも近在の者で、給料さえ満足に貰えば、何の不^や平なく勤めるといった肌合らしく見えるのでした。

「御免よ」

「あ、銭形の親分さん」

顔を知っているのが多いのは、平次のためには仕合せでした。相手は武家で、町方には苦手ですが、幸い文句を言う者もなく、心のままに調べは運びます。

川波勝弥は腕前も男つ振りも申し分はなく、少しばかり薄情なところも、若い女には一つの魅力だったかも知れません。傷は後ろからたつたと突きにやられたもので、一流の

使い手の背後に忍び寄って、これだけの業わざをするのは、よつぽど胆すわの据すわった、腕うでのできるものでしょう。

川波勝弥は、見た人の話によると、右手を一刀の柄つかにかけ二三寸抜きかけたまま、こと切れていたそうです。

一と通り家の中も見せて貰いましたが、よつぽど学問が嫌いだったらしく、史書経書は言うまでもなく、庭訓ていしん往来おうらい一冊ないのはサバサバしております。

「八、近所の衆の噂を聴いてみな」

平次は顎あごをしゃくりまします。

「さんざんですよ。借りは拵しらえる、飲み倒しはする、家賃だって五つも溜たまっていまさア」
八五郎は酸すっぱい顔をして見せました。

「女出入りはないのか」

「男前と腕前うぬぼれに自惚うぬぼれがあつたものか、その道には恐ろしく勘定高かつたようで」

「女出入りに勘定高いつて奴があるものか。お前なんか、勘定低い方だ」

「へッ、違えねえ」

「本人がそう思い込んでいりや世話アねえ」

「もつとも柴田の跡取り娘を狙ったり、何とかいう大身に躰入りする話があつたんだから、少しは気をつけたんでしようよ」

「八五郎だつても、狙つた穴がありや」

「解りましたよ、親分」

「もう少し身が持てるだろうよ」

無駄を言いながらも、平次の探索はピシピシと壺つぼにはまって行きました。

半刻はんとき（一時間）あまり後、何もかも見尽して、川波勝弥が恐ろしい喰わせ者であつた

ことまで逐一解りました。

「さア、今度はむずかしいぞ。現場を覗いて、肴町の道場へ行くんだ」

「合点」

平次が号令をかけると、八五郎は忠実な猟犬のように飛び出します。銭形流の神速主義でこの事件を一気に片付けようというのでしよう。

四

川波勝弥が殺されていたのは、神楽坂の裏道で、滅多に人の通らないところ。死骸を見付けたのは夜が明けてからです、殺されたのはたぶん真夜中だろうということでした。

往来は掃き清めて、何の跡も残らず、近所で訊いても少しの手掛りありません。

平次と八五郎は、いい加減に諦めて、肴町の道場に向いました。

「御免下さい」

平次はお勝手口から腰を低く入って行きましたが、相手はそれ以上心得て、

「銭形の親分か、さアさア入るがいい。お前が来るだろうと思つて、心待ちに待つていたよ。土地の御用聞は、幽霊を縛る心算つもりでいるんだから、手のつけようはない」

そんなことを言つて迎えてくれます。二十五六の若い浪人者、これが林彦三郎というのでしよう。身体は大きい、あまり智恵のありそうな男ではありません。

「とんだことでございましたな、——旦那は林さんとおっしゃるんで」

「そうだよ、川波氏に昨日手ひどく負けた一人だ」

そんなことを言つて、彦三郎はカラカラと笑うのです。

「先生は容体が悪いそうじゃございませんか」

「それで困っているんだ。半身不自由といつても、昨夜まであんなに元気でいた人が今日

はもう正体もない」

彦三郎の顔はさすがに曇ります。

「ちよいと、御容体だけでも——」

「あ、いいとも。疑念の残らないように、よく見て行くがいい」

彦三郎は、先に立って、サツサと奥へ入って行きました。奥といっても、至って質素な家屋で、大きな道場を除くと、人間の住めそうな部屋は幾つもあります。ゆうべ林彦三郎が酔っ払って下男部屋へもぐり込んだというのも尤もな^{もつと}ことでした。

「お半殿、町方の御用を勤める平次親分が来たが——」

「どうぞ」

物の気はいがして、中から静かに障子を開けたのは、十九か——せいぜい^{はたち}二十歳とも見える、綺麗な娘でした。去年の秋自害して果てたという姉のお類は知りませんが、妹のお半の美しさと高貴さは、平次もちよつと立ち止まったほどです。

「……………」

平次は自分の職業的な姿や気持に、妙に浅ましさを感じてそつと一礼して、黙ったまま部屋の中に滑り込みました。

主人の柴田弾右衛門は、五十六七の中老人で、まだ老い朽ちた年ではありませんが、半歳の病気に蝕むしばまれて、少しむくんだ、鉛色の顔などを見ると、卒中性の躰いびきを聞かなくても、人など殺せる容体ではないことは余りにも明らかです。

「昨日までは起きていなすったんですね、お嬢さん」

平次は少し尻ごみをしながら訊きました。

「え、昨日まで床の上に起上がって機嫌よく話しておりました——今朝起きてみるとこの通り」

お半は涙を吞みます。

「左半身は不自由だといつても庭ぐらいへは出られたそうですよ」

ガラツ八は町内の医者から聴いた通りを補ってくれました。

「ところで、この道場の跡は、どなたが継ぐことになっていたんでしょう」

平次の問いは当然の筋道です。

「さア、——私には解りません」

お半はそう言つて、心細くも林彦三郎を顧みます。

「亡くなつた川波氏が、これも亡くなつたお類殿と一緒に成つて、この道場を継ぐはずで

はあつたが——」

林彦三郎にもそれ以上のことは解らなかつたのでしよう。

「中条流の免許皆伝というようなのは、どなたが譲り受けられるのです」

「……………」

お半と彦三郎は顔を見合せたつきりこれも返事はありません。

平次は調子を変えて、

「お嬢さん、ゆうべ何か変つたことに気がつきませんか、夜中に出た者があるとか、帰つた者があるとか」

「いえ何にも」

「今日は？」

「皆んな一度ずつは出たようです」

これでは何の手掛りにもなりません。

「死骸の側で割れていたというふところかのみ懐中鏡は、ふだん平常どこにおいてあるんで」

「お仏壇の中に入れてあります」

後ろの方で、ガラツ八がそつと肩を縮めました。話が怪談がけると、大の男のくせに恐

ろしく敏感です。

「林さんは昨夜たいそう酔いなすったそうですね」

「いやもう滅茶滅茶、前後不覚に下男部屋に転げ込んだよ」

「今朝まで、何にも御存じなかったのですね」

「面目ないが、その通りだ。本当に水も飲まなかったよ」

林彦三郎は苦笑いするばかりです。

平次と八五郎はそれつきり引揚げるより外はありません。道場の前を通って、下男部屋を覗くと、大痘痕おおあばたの熊吉が、庭の掃除をすませ、手焙てあぶりを股火鉢にして、これだけは贅ぜいたく沢らしい煙草を燻くゆらせております。

「熊吉と言ったね」

「へエ——親分さん方、御苦労様で」

「川波さんが殺されたことについて、何か心当りはないかえ」

平次は我ながら平凡なことを、平凡な調子で訊きました。

「天道様てんとうは見通しでござりますよ、親分さん」

熊吉は醜い顔を歪ゆがめました。

「それはどういうわけだ」

「あの方のために、お嬢さん——お類さんは死んでしまいました。若い娘一人を殺して、ろくなことがあるわけはありません」

「ゆうべ、川波さんの帰ったのを知っているかい」

「よく知っております。亥刻半（十一時）少し廻った頃で、たいそうな機嫌でしたよ」
「それから誰も出たものはないのか」

「犬つころ一匹出ません。表戸はこの私が閉めたんですから」

「裏から出る手もあるぜ」

「裏は宵のうちに閉めてしまいましたよ」

「林さんはたいそう酔っていたそうだね」

「へエ——、ここへ転げ込んで、とうとう泊ってしまいました」

「ここでもまた飲んだそうじゃないか」

「とんでもない、ここにはろくな茶もありません」

平次の仕掛けた罠わなは見事に外れました。

五

平次はそれつきり引揚げたのです。

「親分、何だつてあの野郎を縛らなかつたんで」

「誰だい」

「下手人は林彦三郎とかいう浪人者に決っているじゃありませんか。あの熊吉と口を合せ、昨夜どこへも出なかつたことにしているに違いないじゃありませんか」

ガラツ八は不平で一パイでした。

「そう判つているなら、戻つて縛るがいい。あの林彦三郎というのは、中条流の使い手だ。丸橋忠弥を挙げるほどの手数を覚悟するがいい」

「じゃ親分は、怪我が大きくなりそうだから、見す見す怪しい野郎を放っておくんで」

「馬鹿ツ」

「へエ」

「なんとという口の利きようだ」

平次の叱咤しつたは峻烈しゅんれつを極めました。十手捕縄を預かつて、銭形のと何か何とうた謳うたわれる

平次には、相手の腕つ節を恐れなただけの自尊心はあつたのです。

「相済みません」

「林彦三郎を縛るには、縛るだけの手順が入用だ。俺はあの男の腕つ節が怖いんじゃない、——死骸の側に落ちていたギヤマンの懐ろ鏡が怖いんだ」

「するとやつぱり幽霊？」

「仏壇の中にある、懐ろ鏡を、林彦三郎が持つて行くはずはない」

「なるほど」

平次が深々と腕を拱くと、それを真似たように、八五郎ももつともらしく腕を組むのでした。

「もういちど引返して、熊吉の身許と、奉公人たちの様子、林彦三郎とお半の仲を訊いて来てくれ。熊吉が給金を溜めているかどうか、主人父娘に受けが良いか悪いか。それから林彦三郎とお半がどんな心持でいるか。お半は弁天様のように美しいが、彦三郎はあまり美しい男じゃない。が、人間は悪くないな」

平次の独り言を背に聴いて、ガラツ八は引返しました。叱られた腹癒せに、素晴らしいネタを挙げて来ようというのでしょうか。

その晩、

「親分、骨を折らせたぜ」

ガラツ八がヘトヘトになつて歸つたのは戌刻（八時）過ぎでした。

「どうだ解つたか」

深い思案から呼び覺されたような平次。

「道場や武家屋敷は苦手だ。突つ込んだことを訊くとジロジロ人の顔を見ながら腰の物な
どを捻くりやがる」

八五郎は足の埃を叩いてにじり上がつて、お静の汲んでくれるぬるい茶に喉をぬらしま
した。

「どうしたんだ」

「林彦三郎という浪人者にちよつかいを出して、いずれお半さんとわけがおありでしょう
——と言うと馬鹿を申すなツお嬢さんはそんな方じゃない。重ねてそのようなことを言う
と許さんぞツ、と来た」

「フーム、よほど手厳しくやられたとみえるな」

「手厳しいのなんのつて、あつしは抜いたんじやないかと思ひましたよ」

「お前の話じゃない。林彦三郎が手ひどく弾はじかれたというのさ」

「へエ——」

「それから、熊吉はどうした」

「あの野郎は溜める一方、五十くらいに見えるが、実は三十七八だろうという話ですよ。四十前で金を溜める気になるのも、あの松皮瘡瘡のせいでしょう」

「八五郎が溜らないのは、男つ振りのいいせいかい」

「無駄を言っちゃいけませんよ、親分」

「ところで、けさ一番先に外へ出たのは誰だ」

「熊吉ですよ、——それから彦三郎」

「柴田弾右衛門の容体は？」

「悪い一方、町内の本道（内科）も首を捻ったそうで」

「困ったことだな」

「何が困るんで？ 親分」

「下手人は容易に拳がるまいよ。まア、時節を待つんだ」

平次は諦めた様子で、大きな欠伸あくびをしました。

六

「た、大変つ」

その翌^{あく}る朝、疾風のごとく飛び込んで来たのはガラツ八のあわてた姿です。

「どうした八、たいがい大変が舞い込む時分だと思つて、その辺を片付けさしたところだ」
平次はさして驚く色もありません。

「あれ、驚かないんですかい、親分」

「林彦三郎が自首して出たんだらう。それくらいのことみとおは見透しさ」

「有難いッ、——銭形の親分にも見込み違いがあるんだ。それがなかつた日にや、こちとらが助からねえ」

ガラツ八はピヨイと飛んで、自分の額を叩きます。

「何が違つたんだ」

「彦三郎は自首なんかしませんよ、——けさ神楽坂の裏路地で、こんどは下男みとの熊吉が殺されていたんで、——川波勝弥が殺されたのと同じ場所だ」

「刃物は？」

「こんどはあいくちヒ首」

「前からか、後ろからか」

「前から喉笛をひと突きにやられていますよ」

「解った、——それじゃ大急ぎで、肴町の道場に見張りをおけ。下つ引を何人でも駆り出すんだ」

「合点」

「ちよつと待つてくれ、八」

「へエ——」

「熊吉を殺したヒ首は、死骸の側にあつたんだろうな」

「喉に突つ立つたままですよ」

「そいつは誰のだ」

「熊吉ですよ」

「自分のヒ首で殺されたのか」

「因果な野郎で」

「よし、行け」

「へッ」

ガラツ八は宙を飛びます。平次はそれから一としきり考えて、悠々と身仕度をして神楽坂へ行きました。熊吉の死骸は取片付けて、近所の衆は何にも知らず、平次はそのまま肴町の道場へ、手繰たぐられるように行くより外に工夫もありません。

「親分」

「なんだ」

遠くの方から声をかけたのは八五郎でした。

「やっぱり親分の勝だ」

「何を言やがる」

「林彦三郎は自首して出ましたよ」

そういう八五郎の声には、得意らしさが、溢あふれておりました。親分の見込み違いを喜びおおせるにしては、八五郎はあまりにも正直すぎたのです。

「どこにいるんだ」

「神楽坂の番所ですよ」

「よしッ、来いッ」

平次は飛んで行きました。続くガラツ八。

番所には見廻り同心賀田柰左衛門もくざえもん、土地の御用聞、赤城の藤八などが、雁字がんじがらめにした林彦三郎を護まもつて、与力よりきの出役しゅつやくを待っているのです。自首して出たといつても、中条流名譽の遣い手、万一のことを心配しての手当でしょう。それを心から受け容れた様子で、林彦三郎黙々としてうな垂れております。

「お、平次か。よく来てくれたな」

同心賀田柰左衛門は、自分の腕に自信がないだけに、錢形平次の顔を見るとホツとした様子です。

「賀田の旦那、繩は少し厳しすぎはしませんか」

いきなり平次の言ったのはこんな言葉でした。

「どうして？」

「自首して出たくらいの林さんです。繩にも及ばないでしょうが、念のためというなら、腰繩くらいで沢山で」

「だが」

「この平次にお任せ下さいませんか。林さんを縛っただけじゃ、この事件は埒があきません。ね、赤城の親分」

平次は赤城の藤八にも賛成を求めます。

「勝手にするがいい。だが、俺は知らないよ」

賀田左衛門はそっぽを向きました。

平次はその間に林彦三郎を縛った縄をとり、埃まで払ってやりながら、そこに腰をおろしました。

「ね、林さん。貴方は熊吉を殺したとおっしゃるのですね」

「その通りだ」

「なんだってあいくち首なんかで殺しなすったんです。不都合なことがあるなら無礼討ちにしたって構わない相手じゃありませんか」

「匕首を抜いて向って来るから、奪い取って突いたのだ」

「返り血はひどかったでしょうね」

「いや、大したことはなかった」

二人はしばらく黙りこくってしまいました。ほんの幾瞬間の間ですが、激しい捜り

合いが腹と腹とで行われている様子です。

「川波勝弥さんを殺したのは、あれは誰でしょう」

平次は第二段の問いに入りました。

「それもこの林彦三郎だよ」

「理由は？」

「武士として許し難きことがあった」

「それだけで？」

「それで沢山だ」

「武士として許し難きことがあったのなら、なぜ名乗って果し合いをなさらなかったのです。酔っぱらった者を後ろから突いて殺すのも、武士として、許し難いことじゃございませんか」

「……………」

彦三郎は唇を噛みました。一言もない姿です。

「脇差はどうなさいました」

「お濠^{ほり}へ投げ込んだよ」

「鏡は」

「……………」

「死骸の側に落ちていた鏡は、あれはどうしたのでしょうか」

「俺は知らぬ、——川波勝弥が持出したのだろう」

「それでお白洲しらすが通るでしょうか」

「……………」

林彦三郎はもういちど唇を噛みます。

「八」

「へエ」

平次は八五郎をさし招くと、

「道場へ行つて、皆んなにそう言うがいい。林彦三郎さんが自首して出ました、御安心なさいますようにつて、——川波勝弥殺しも、熊吉殺しも、林さんに違いありません。と、こう言うんだ。奥まで通るように、なるべく大きな声を出すんだよ、いいか」

「へエ——」

八五郎は飛んで行きました。さぞ、さかなまち肴町中に響き渡るように張り上げたことでしょ

う。

それから一刻いっとき（二時間）ばかり、掛り与力、笹野新三郎出役、賀田左衛門や、藤八、平次などの報告を聴いて、

「それで相解つた。自首して出た林彦三郎は、一応宿元へ引取らせ、家主に預けおくがよろう」

笹野新三郎も、平次と同じように、林彦三郎を疑う心持はなかつたのです。

「恐れ入りますが、旦那」

「なんだ平次」

「林彦三郎はやつぱり、下手人としてお引立てになつた方がよろしゅうございます」

「そうかな」

「あの通り八五郎がぼんやり戻つて参りました。道場へ知らせやっても、誰も何とも言わないようじゃ、他に下手人があるわけはありません」

笹野新三郎は黙つて顔を挙げました。その旨を承うけて、下つ引が二三人。

「立てッ」

林彦三郎の三方からバラバラと取巻きます。

「どうだ八、——存分に張り上げてみたか」

平次はガラツ八を迎えてこう訊きました。

「節分の豆撒まめまきほどに張り上げましたよ。岸松太郎も、大原幸内も、黙って顔を反そむけたつきりさ。武家なんてものは薄情だね」

「お嬢さんのお半さんは」

「何にも言わねえ、お面のような顔をしていましたよ。あの娘は綺麗だが、優しいところのねえ女だ。嬉しそうな顔もしなきや、悲しそうな顔もしねエ」

ガラツ八の注沢山な報告を聴きながら、林彦三郎は淋しく引立てられて行きました。

七

それから幾日か経ちました。

「親分、あの一件が、どうも気になってならねえ。どうしたんでしようね、一体ガラツ八は変なことを言い出します。」

「道場の一件か」

「エ、川波勝弥殺しに熊吉殺し、あれはやつぱり自首した林彦三郎が下手人でしようか」
「解らないよ」

「あつしは、あの娘じやないかと思うんだが、——あの娘が、姉の敵討ちの心算で、川波勝弥を殺し、それを知つて強請がましいことを言うんで、熊吉を殺したんじやありませんか」

「さア」

「林彦三郎は、娘を助けたさに、身に覚えのない罪を背負つて名乗つて出たんじやありませんか」

ガラツ八の疑いは尤もでした。が、平次は、

「あの娘に川波は殺せないよ」

まるつきり取り合いません。

「後ろから不意に刺したとしたら？」

「川波勝弥はよつぽど使えたそうだ。一流の達人が、酔っぱらっていたくらいのこと、女子供に一刀で仕留められるものではない——それに」

「それに——」

「林彦三郎がお半の身代りに縛られたのなら、お半が黙っていないはずだ。彦三郎が縛られたと聴いても、お半は驚きも歎きもしなかったのは変じゃないか」

「なるほどね」

感心した所で、ガラツ八には何が何やら見当が付きません。

「林彦三郎は口書きくちが拇印ぼいんも済んで、伝馬町へ送られるという話だ、困ったことだな」
何かしら、平次にも鬱陶うつとうしい日が続いたのです。

二月になって、ある薄寒い日の夕方のことでした。

「お客様ですよ、お前さん」

お静は半分目顔に物を言わせて取次ぎます。

「どんな方だ」

「若い、お武家方のお嬢さんで」

「丁寧にお通し申すんだ」

平次はどうとう来るものが来たような気がしたのです。

「親分、道場の一件でしょうね」

「そんなことだろうよ」

八五郎は急に坐り直しました。狭い着物から、膝小僧ひざこぞうがはみ出します。

「親分、とんだ御迷惑を掛けました」

そつと滑り込むように、畳に両手を落したのは、やはり柴田弾右衛門の二番目娘お半です。

「あ、お嬢さん、お父さんは」

「亡くなりました。——今朝ほど」

「やっぱり、ね」

「あとあとのことは、門弟衆にお頼みして参りました。私を縛って下さいまし」

「……………」

「熊吉を殺したのは私でございます」

「すると?」

「熊吉は、私を誘い出して無体なことを申します。最初は胸をさすって帰ろうかと思いましたが、あいくち首まで抜いて私を脅おしかしますので、ツイ得物を奪い取って——」

「刺したというのですね、お嬢さん」

「ハイ」

「返り血を浴びたはずだが」

平次は一步突つ込みました。

「林様が始末をして下さいました。どこか土でも掘って埋めたことでしょうか」

お半は神妙に言いきつて、美しい顔を挙げました。

「川波勝弥を刺したのは？」

平次はそれも聴きたかったのです。

「あれは存じません」

「え？」

「私ではございません」

「懐ろ鏡は？」
ふとこかがみ

「あれは私のでございます」

「さア解らない。もう少し詳しく話して下さい、お嬢さん」
くわ

「川波勝弥は悪い人でございました。姉が自害したことが世上の噂に上り、大身への智入むこいりの話も破談になると、今度は、私へ無体なことを申しました」

「なるほど」

お半の美しさを見てみるとそれは全くありそうなことでした。

「あまりのことに手厳しく申しますと、父上の手文庫から中条流の伝授書を持出し、この道場を取潰すと申します」

「フーム」

「それはあの晩のことでもございました。もし、伝授書が返して貰いたかったら、一緒に来いと言うのです」

「……………」

「私はともかくも後を追いました。言われた通り神楽坂の裏道へ入ると、道の真ん中に倒れている者があります。月明りに透すかして見ると、川波勝弥の死骸」

「……………」

「後ろから脇差で刺されておりましたが、見ると、脇差は柴田家のもの——父上御秘蔵のひとふり」

「……………」

「私は夢中でそれを屍したい体から抜き取りました。それから日頃姉上の形見と思って身に付けておいた鏡——亡き姉上の怨うらみの籠こもった懐ろ鏡を、敵討ちを果したつもりで、死骸の側に

割って置きました。あの世まで姉を追わせたくなかつたのでございます」

「その脇差を下男の熊吉に始末させたばかりに、それを種にこんどは熊吉に強請ゆすられたと言うのですね」

「その通りです、親分」

お半の顔は玲瓏れいろうとして一点の陰影もありません。

「それで判った」

「川波勝弥を殺したのは誰とも判りませんが、熊吉を殺したのはこの私に違いございません。このまま私を縛って、林様を許して上げて下さいまし」

お半は神妙に、両手を後ろに廻すのでした。

「もういい、お嬢さん。——熊吉を刺したのは、不忠な家来を無礼討ちになすつたのだ。お嬢さんの罪じゃない。川波勝弥が殺されたのは天罰だ。お嬢さんにも、林彦三郎さんにも罪はない」

「親分」

「林さんは何とかして助けて上げましょう。お嬢さんは道場へ帰って、何も言わずに葬式の仕度をして下さい」

「親分」

お半は泣いておりました。暈に突つ伏した顔はなかなか上がりません。

「八、もう日が暮れたろう。お嬢さんを肴町まで送つて上げろ」

「へエ——」

「俺は八丁堀まで行つて、笹野の旦那に申上げて、林さんの縄を解いて上げる」

三人はお静に送られて路地を出ました。

「お嬢さん」

平次は往来に立つて牛込の方へ行くお半を呼び留めました。

「……………」

「林さんは立派な武士だ。嫌つたりしちや済みませんよ」

「……………」

「あの方は、黙つて死罪になる気でいた。この恩返しはお嬢さんの胸にあることだ。お解りでしょうね、お嬢さん」

お半は首を垂れた様子です。梅二月、寒い風が吹いて、そうさせたのかも知れません。

*

「ね、親分あつしはどうしても解らねえ、川波勝弥を殺したのは誰でしょう」
事件が落着して、お半は林彦三郎を躰に迎えたと聴いた時、八五郎は絵解きをせがみま
した。

「解らないのかえ」
と平次。

「へエ——」

「呑気のんきな御用聞だね」

「お半でなし、林彦三郎でなし」

「もう一人いるじゃないか」

「あ、あの中気病みの——」

「そうだよ、柴田弾右衛門だよ。中気が当たったといつても半歳ほど前のことで、近頃は庭
へも出られるようになっていたんだ。川波勝弥のすることが弾右衛門には門弟ながら憎く
てたまらなかつた。それに少しの油断から手文庫の伝授書を奪われ、その上大事の二番目

娘お半までおびき出されそうになったので、死物狂いで追いすがって、脇差で背後から刺したのさ。さすがに中条流名譽の腕前だ、名乗って正面から向っては敵かなわなくとも、後ろからなら門弟の一人ぐらいは成敗できる。そのまま帰っては来たが、心と身体を使いすぎて二度目の中氣にやられた」

「なるほどね」

「その後へお半が行って脇差の始末をし、姉の怨みを晴らす心算つもりで、形見の懐ろ鏡を死骸の側で割って来たのさ。若い娘だから、後に証拠の残ることなどは考えない。あの世とやらへ行つて、川波勝弥と姉のお類の縁が切れなきや困るだろうとでも考えたんだろう」

「……………」

ガラツ八も固唾かたずを呑みました。妙に身につまされた心持です。

青空文庫情報

底本：「銭形平次捕物控（十一）懐ろ鏡」嶋中文庫、嶋中書店

2005（平成17）年5月20日第1刷発行

底本の親本：「銭形平次捕物全集第二十三巻 刑場の花嫁」同光社

1954（昭和29）年4月5日発行

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1940（昭和15）年2月号

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：noriko saito

2019年6月28日作成

2019年11月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

懐ろ鏡

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>